

漱石の送籍

Junko Higasa 2014.3.17

『吾輩は猫である』の中に、送籍(漱石)という男が『一夜』という短編を書いた話が出てくる。この短編の中には太平を望む吾輩と苦沙弥がいる、画工が描こうとする那美さんや達観した和尚がいる。甲野さんや「森の女」に封じられた美禰子がいる。すなわち『一夜』は後の小説の草案のようなものだ。その中には「動けば変わる女性」を静のまま留めたい希求と、「世の多勢の情に流されて物事の本質を見失ってはならない」という「個人主義」が描かれている。

「送籍」という当て字は、漱石が徴兵を逃れるために北海道へ一時移籍したことの告白であるが、それは「大和魂」という言葉の表面に踊らされて、本来の人間性を失うことへの抵抗ではなかったろうか。

天下の実権が箸の端^{さき}に掛かれば、「支配」という胃袋が呑むのは必然である。国は「大和魂」という古来からの夢の言葉を用いて美しい画を描こうとした。しかし送籍は「本来の大和魂」に「当世大和魂」を上塗りした箸に掛からず、国家規制という胃袋に落ちなかった。心と表情が一致してこそ「人生」という画が完成する。その個人主義を貫いたのである。

『一夜』では、髭のある男と髭のない男（軍人と民衆、先達と新人などの対比）と、美しい女が一か所に集まり、その地位や年齢や性別に関わりなく、人間としての平等な太平の眠りに就いた。その各々の個性が共存を目指すのが本来の人間社会だろう。